

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

中 里 重 吉

1. 紀行文学の性格

現代文学が著しく発展してきて、さまざまの変貌と展開を見せているときに、紀行文学というものをもち出してきてみて、これを適切に位置づけ、正しく評価ができ、また今後の存続の予測が行なわれうるかどうか。すなわち現代文学の現況の中において、紀行文学が自己を主張できる位置がなお保たれているのか。それとも、すでに独自の領域を失って、他の類域の中に融合解消してしまったのか。

現代文学はすでに、従来の文学ジャンルで律しきれぬほどに展開拡散してきているので、随筆・日記の類より軽質な紀行文学の区々たる存在のごときは、見るかげもなくかすんでしまっているのかもしれない。せいぜい、紀行の体をとった何かとか、あるいは紀行的構想をもった何かとかいう形でしか存続していないのであろう。

あるいは、現在は、文学の外にまでこえて、ひろく文化人と称する人々の手になるもの、とくに青少年の若々しい新鮮な目をもって綴る海外旅行・冒険旅行の記録も加わってきて、むしろ、そのようなものが歓迎されている現状である。

遠く日本文学史の流れをさかのぼった場合、紀行文学は文学として主流でこ

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

そないが、1つの役割を果たし、1つの位置を占めてきている。

すなわち、まず『万葉集』の中にその源流を見、平安時代には『土佐日記』『更級日記』など、鎌倉時代には『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』の一連の代表作、南北朝、室町時代に下ると、世は戦国時代に連り、歌学者、連歌者流の旅日記があり、近世では庶民文化の高まりと共に、仮名草子の中に見られる名所記・道中記など、文人墨客の遊歴紀行もさかんとなり、後期には名所案内記、名所図会の類の啓蒙的、娯楽的なものがあらわれた。

次に、紀行文学の性格をまとめておきたい。

日本文学大辞典（藤村作編，新潮社）によれば、文学様式としての紀行の性質を、次の4つあげている。

- (1) 自己自身を告白する形の文学であるために、叙述の対象が必ず過去にある。
- (2) 旅路に於ける自己自身の見聞・体験・感想等を、その要素的条件とするため、表現形式には常に第1人称が用いられ、その表現も比較的無技巧、端的でまた写実的である。故に、近世には一般的に著しく客観的な「記録」、または「備忘録」の性質を含んだものが多い。
- (3) 当面の事象に対する自己の関心を、記述対象とするため、多くの場合特定の個人か、一定の地理的または時間的制約を免れない。
- (4) 表現形式に一定の規則がないため、雅文体、漢文体の外、和歌、俳句、漢詩等の抒情詩を含み、叙景的な部分もあって、一般に諸種の文学様式を綜合するが如き傾向が認められる。(以下略)

現在、現代紀行文学一般について通用する文学理論、せめて現代日本文学における紀行文学に対する理論で、特別によるべきものは、管見の然らしむところか、見当たらない。そこで、この辞典的な、まず穏当な性格規定に従って

いく。

ここに、あげられた4つの性格規定を吟味することから始めたい。

(1) の叙述の対象が過去にあるということは、改めていうまでもなくきわめて当然である。もし、これが未来とすれば、想像憶測による未来記か架空小説になってしまうし、また現在ならば、ひとつのルポルタージュであって、切迫している刻々の現実を写すに急で、筆者の文学的粉飾を施す余猶はおそらくあるまい。

旅が終わり、その過ぎし旅のあとをかえりみて、筆を執り、紀行が生まれる。もちろん、その道中における所見をスケッチし、書きとめていくこともあろうが、それも旅を終えてまとめ整理してはじめて成るものである。

(2) については後述する。

(3) は一定の地理的、時間的制約は免れないということで、これは旅そのものの性格が然らしめるところなので、「旅」の文学である紀行の本質である。

(4) についても、「旅」という内容規定の外には、表現形式に特別とらわれるべきでなく、感興に即応した種々の文学様式が採られ、綜合されることもありうる。

さて、ここで後まわしにした(2)をとりあげてみる。たしかに紀行が「旅」の「記録」または「メモ」であるかぎりにおいては、客観的な記録であって、写実的な表現が要求されてくる。そのためには、端的で、無技巧であることがむしろ勝る。

ところが、日本紀行文学史の頭初にあらわれる『土佐日記』をみると、「男もすなる日記といふのを、女もしてみんとてするなり」とあって、まず筆者貫之の奇妙な構想上の虚構⁽¹⁾にぶつかるのである。『土佐日記』という題名では日記であり、内容は紀行とみなされ、しかもそこに戯曲的構成⁽²⁾も指摘される。

これが、紀行文学の代表作品である『おくのほそ道』になると、曽良の『随

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

行日記』が出るに及んで、芭蕉の加えた虚構が明確にされ、虚構性の問題が大きくとりあげられるにいった。

ここで、客観的な「旅」の「記録」または「メモ」と、『土佐日記』『奥の細道』にみられた虚構を加えた文学作品との別を立てておくのが至当でなかろうかと考えるのである。

前者には、もちろんその旅の見聞における筆者自身の感懐が、率直に述べられることもありうるわけである。むしろ、かえってそれが、その人の旅の記を一段と生彩あらしめることにもなろう。そして、文学に迫るものもあろう。

この類のものを「紀行」と称したい。

そして、後者のような文学作品、文学的発想のもとに、それは当然文学的表現をとるにちがいないが、文学的虚構が加えられたものを、「紀行文学」として区別する。

そこで、日本紀行文学史をたどりながら、この後者にあてはまる「紀行文学」作品をとりあげていけば、すっきりした日本紀行文学史がまとまるのではないかと考えてみた。せめて、今後そのように考えていきたいと思うのである。もちろん、この考え方は、「日記」と「日記文学」「随筆」と「随筆文学」というようにも考えられて、この場合は、紀行よりも、その性格の上から、一層複雑な考察を深めていくことになるかもしれない。

このように考えてみた「紀行文学」の完成された典型として、『おくのほそ道』をとりあげ、紀行文学にそなわる実質を確かめていきたいというのが、本稿の趣旨なのである。

2. 芭蕉の旅

『旅人芭蕉』とか、「旅する俳聖」などといわれているように、芭蕉自身も辞

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

世の句「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」をのこし、芭蕉にとって、旅は彼の人生そのものの象徴にまで高揚されていたことは、ここに改めて言うまでもない。

芭蕉が伊賀上野で出生し、浪華大阪の地に51歳で病歿するまでの生涯をたどると、芭蕉が旅に出たのは、次のようにあげられる⁽³⁾。

寛文12年（29歳）春、江戸下り

延宝4年（33歳）6月帰郷、また江戸へ下る

（延宝8年 冬、深川の芭蕉庵に入る）

元和2年（39歳）12月芭蕉庵類焼、高山麁崎をたよって、甲斐の谷村に約半歳をすごす

貞享元年（41歳）8月門人千里を伴ない、伊勢、伊賀上野、それより吉野をめぐり、熱田に入り名古屋より再び伊賀上野へ、翌年2月奈良を経て京に出、京および湖南におること約1か月、熱田、鳴海に来て、甲斐を経、4月末江戸深川に帰る（以上9か月にわたる旅の記が『野ざらし紀行』である）

貞享4年（44歳）8月曾良・宗波を伴ない鹿島、潮来に遊ぶ（この紀行を『鹿島紀行』という）

同年 10月江戸を立ち、鳴海より越人を伴ない、保美へ行き、鳴海に帰り、熱田、名古屋より伊賀上野へ、翌年2月伊勢参宮の後、伊賀上野で亡父三十三回忌をすませ、のち、万菊丸（杜国）を伴ない、吉野、高野山、和歌浦、奈良より大阪へ、須磨、明石に遊んで、4月京に入る（前年冬江戸を立てから、この入京までの紀行を『笈の小文』という）

京都で杜国と別れ、湖南に移り、のち美濃に下り、大垣、岐阜より名古屋、鳴海へ、8月中旬越人を伴なって、木曾より信州更科の月を賞し、善光寺に詣で、月末に江戸に帰る（この紀行を『更科紀行』という）

元禄2年（46歳）3月下旬曾良を伴ない、いわゆる『おくのほそ道』の旅に出立、日光、白河、福島、仙台、松島、平泉等を経て、新庄、出羽三山、酒

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

田、象潟をめぐり、北陸道を、金沢から福井、敦賀へ、8月末大垣に入る
(『おくのほそ道』はここで終わる)

これより伊勢へ遷宮を拝し、伊賀上野に立ちよって、路通を伴ない、奈良を
経て京都へ、京・湖辺にとどまり、膳所で越年、新年には伊賀上野に帰り、
再び膳所へ、幻住庵に入って、秋大津の義仲寺の無名庵に移る。しばらく湖
南にあって、その間帰郷を重ねたが、翌年の夏には、半月余り嵯峨の落柿舎
に滞在(この間の日記が『嵯峨日記』である)

10月末、3年ぶりで江戸に帰る

元禄7年(51歳)5月次郎兵衛を伴ない、江戸を立つ。島田、鳴海、名古屋
より伊賀上野へ、のち大和、加茂を経て、湖南に出、やがて落柿舎に入る。
盆会のため帰郷。9月8日支考・惟然・次郎兵衛・又右衛門を伴ない、奈良
より大阪に出る。激しい下痢を起して病臥、10月12日死去

芭蕉の旅で、最後の旅は、いかにも芭蕉にふさわしく、その途上にして生を
終わることになったのであるが、芭蕉がようやく円熟して、本格的活動に入っ
た晩年10年間に、芭蕉にとって旅らしい旅が行なわれ、しかも、その10年間の
大半を、芭蕉は旅に出ていたことになるのである。

そのうち、『鹿島紀行』『更科紀行』は共に、小篇の紀行であり、従って小旅
行ではあるが、風光を賞する旅らしい旅であった。

『野ざらし紀行』と『笈の小文』とは、故郷伊賀上野を訪れての、名古屋、
京都方面への旅行であり、なるほど紀行として作品化されたものでは、風雅の
旅であったとしても、やはり実務のための旅であったことも否めまい。

その点、『おくのほそ道』の旅は、蕉門、知友の人々を訪問し、あるいは蕉
門の拡張の用もかねていたとしても、やはりこれは風雅をきわめるための、旅
そのもののための旅であった。しかも、その旅行の規模において、『鹿島紀行』
『更科紀行』の比でなく、旅程6百里に及ぶ大旅行であった。東海道による、

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

京阪へ通ずる賑やかな旅とことかわり、「みちのく」への道から北陸路へかけての、「羈旅邊土への行脚」であり、「もし生きて歸らばと定めなき頼みの末をかけ」た旅であった⁽⁴⁾。

3. 芭蕉の紀行⁽⁵⁾

芭蕉がこれらの旅から生まれた紀行について、『おくのほそ道』に達する、道標的性格をどってみたい。

『野ざらし紀行』は草稿のまま伝えられ、定まった名称とてなかった。世に出た最初の刊本は、元禄11年(1698)風国の『泊船集』に収められたもので、『芭蕉翁道之紀』と題された。『野ざらし紀行』の名は明和5年(1768)刊文台屋七兵衛板が最初で、安永4年(1775)刊の関更編『蓬葉鳴』は『野晒紀行』の名で、翌年刊の蝶夢編『芭蕉翁文集』には『甲子吟行』の名で収められ、この2つの名称が並び行なわれた。

この紀行の体裁は、旅中の発句を主体として、散文の部分はその前書を綴り合わせたもので、しかもそれが後半にいたっては息がつづかず、ほとんど句を連ねただけで終わっている。

しかし、文章はかなり苦心が払われて、内容的にも「野ざらし」を覚悟に旅立つその冒頭は、後の『おくのほそ道』に通ずる。

『鹿島紀行』はきわめて短いもので、その成稿は巻末の日付によると貞享4年(1687)8月である。

芭蕉真蹟として、佐藤清一氏蔵『鹿島詣』と、菊本直次郎氏旧蔵『かしま紀行』とがのこされている。板本は、宝暦2年(1752)松籟庵秋瓜が出版した『鹿島詣』が初めて、寛政2年刊(1790)梅人の『かしま紀行』がある。これらは前の芭蕉真蹟の2つの系統にそれぞれ属する。なお、宝永3年(1706)刊の許六編『本朝文選』(『風俗文選』)では『鹿島ノ紀行』と題し、宝永5年(1708)の百里の『東遠濃久』には『鹿島詣』(前半のみ収載)として収められている。

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

体裁は、短篇ながらまとまった小品で、散文の部分と別に文末に発句を一括してあげ、句と文は分離している。

『笈の小文』は、宝永6年(1709)に初めて乙州が世に出した。この乙州の最初の刊本によって広く世に知られ、『笈の小文』として一般に通用する。

なお、蝶夢の安永5年(1776)刊『芭蕉翁文集』や、仏号・湖中の文政10年(1827)刊の『一葉集』には『卯辰紀行』の称を用い、後者には「又称芳野紀行」と注記する。さきの『蓬葉嶋』には『大和紀行』の名で収められている。

このように定まった名称のないことは、これまでの紀行と同じく、やはりまだ未定稿のままであったことを証する。

この紀行の体裁は、さきの『野ざらし紀行』と異り、文章が発句と並んで同じ比重をもつにいたっているが、なお全体としてみると、まだ句文の関係が渾然たる融和までに達せず、とくに後半はなお推考の余地を残している。

つづく『更科紀行』は、宝永元年(1704)刊岱水の『木曾の谷』(井筒屋庄兵衛板)に収めたのが、世に出た最も早いものとされ、文末の句の数が少ないのであるいは初稿かともいわれている。

ついで宝永6年(1709)刊の前述の乙州編『笈の小文』には、『更科紀行』として付載するものがあり、これは句の数も多く、本文に若干の異同もある。

なお、ほかに板本、草稿書写本の類が伝存されている。

『笈の小文』の旅の続きで、紀行としては従って小品、句が一括して文末にあるのも、『鹿島紀行』と同じである。

4. 『おくのほそ道』⁽⁶⁾

『おくのほそ道』は、これら4つの紀行の最後につづいて、その最高峰としてそびえ立つ。したがって、その最高峰たらしめるいくつかの要因が考えられる。

すでに、『おくのほそ道』の内容を高からしめている旅そのものについては

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

述べてたので、ここでは前章の轍にならって、作品としての要因を考察したい。

芭蕉がこの『おくのほそ道』にとくに打ちこんだ意気込みと傾注した努力のいかに大であったか、他の4つの紀行に見られぬところである。

それを次の4つの点からたしかめていこう。

- (1) 定稿ができていたこと
- (2) 特別の書写本に自ら装幀を施し、自筆の題簽まで記したものがのこっていること
- (3) 題名を自から用意していたこと
- (4) 制作年月をかけて、推考を尽くし、彫琢につとめたこと

『おくのほそ道』の本文については、故額原退蔵博士が芭蕉の二百五十回忌にあたる昭和18年に素龍清書本（福井県敦賀市西村家蔵）の現存を紹介し、これは芭蕉の稿本を素龍が清書した決定稿と目されるべきもので、現在、最も信頼すべき原本とされている。

この決定稿にいたる草稿本の存在も、

野坡伝来本

其角伝来本

曾良伝来本

の3つが考証されたが、現存は不明のままである。

ほかに門人の手に成る写本が4点伝えられている。

刊本としては、素龍清書本を透き写しにして板下とした井筒屋板行本が、元禄15年（1702）に出、明和7年（1770）再板されている。

この再板の折に、次のような去来の跋が付けられた。

此巻は古師芭蕉翁の紀行にして、素龍清書す。書の長五寸五分、はゞ四寸七分、紙の重五十三、初終に白帄あり。行成の表帄、紫の糸を以てとち、

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

外題は金の眞砂ちらしたる白地に、みづから奥の細道と書、年月頭陀の内にかくして、行先々々に隨身し給ふ。元禄七年水無月、予が方に偶居しまして、かつかつほのめかし給ふを書寫の事深く乞奉りけるに、同じ年の神無月、難波のあしのかりねに心地なやみ給ひぬと聞えぬれば、急ぎとぶらひまかりけるに、枕近う呼給ひて、けふ我やまひ頻なり。汝日ごろ此集の求ふかし。今將に足下に譲りなん。不思議にもなからふるためしもあらば、寫しとどめて本の書を返すべし。書は兄の慰にとて古郷に残し置ぬれば、つとつとに倡（本ノママ）送るなるべしと聞え給ふ。かたじけなくも悲しくもかしこまり、やがて寫しとどめて、めで度此巻は捧侍りなんと涙を落しぬ。かくて遷化の後、兄の許へ文して乞奉りけるに、今はかうやうのものをこそ、しばしとどまるべき老のかたみともなぐさみ侍れば、いささか手にはなち侍らんも淺間しく覺えられぬれど、遺言なれば送りやりぬ。且は奥羽の旅寝の夢の跡もなつかしく、且は門葉の人々の手跡もめづらしと見まほしければ、予に書寫して送り侍るべしと也。（以下略）

これによると、この素龍清書本というのは、元禄7年（1694）5月の、芭蕉の最後の西上の旅に自ら携えて、伊賀上野の兄松尾半左衛門の許に残し置いたが、同年10月芭蕉没後、遺言によって去来に譲られたものである。それが前記敦賀市西村家の所蔵に帰するまでの考証は杉浦博士により明らかにされている。

芭蕉は、兄に贈るべく、この本を能書家素龍⁽⁷⁾にとくに清書せしめ、特別の装幀を施して、自ら『おくのほそ道』の題簽を記し、頭陀の内に収めて、行先先に携行したというほど、芭蕉の心のこもったものである。

この『おくのほそ道』という題名も、これまでの4つの紀行では、芭蕉自身の付した題名がなかったために、後にいろいろと名がよばれるようになったのと異り、このたびは、自ら題簽に書したように、自分で定めたのであった。

この題名⁽⁸⁾については、芭蕉が、本文中にある、仙台の画工北野加右衛門がものした絵図をたよりに、名所をめぐり歩いて、「おくの細道の山際に十符の

菅」があるのを見た。この「おくの細道」によるものとされている。

ここに記されてある「おくの細道」というのは、固有の地名なのであって、その地名に芭蕉が心ひかれるままに、さらに踏み分け行くみちのくから北陸への旅路全体の意味に広げて用い、さらに生命の終わるまでたどり行く風雅の細きひとすじ道を象徴させたのである。

そう考えてみると、この『おくのほそ道』という題名は、芭蕉にとって会心の題名であったのであろう。

作品の成稿についてみると、元禄2年(1689)9月、美濃大垣で『おくのほそ道』の旅を終えて、この素龍清書本の決定稿の成る元禄7年(1694)まで、足かけ5か年の年月を要している。これは、この間、他の事情によるところもあろうが、やはり、これを大切にしていって芭蕉がいかに想を練り、意を凝らして、推考を尽くしていたか、この『ほそ道』1編に寄せた芭蕉の制作意図の、他の紀行には見られなかった熱烈さが知られる。

『おくのほそ道』の旅を終えて、翌元禄3年(1690)4月近江石山の奥、国分山近津尾八幡宮のある山中の小庵「幻住庵」に入って、かの『幻住庵記』をものしている。この『幻住庵記』は、『おくのほそ道』とならび称される芭蕉の代表作なので、その稿を成すに数種の草稿を残している。

この『幻住庵記』完成後、つぎにうつった嵯峨落柿舎滞在の前後に⁽⁹⁾、『ほそ道』の構成を得て部分的に着手したという推定もある。

かくして成った自信作『おくのほそ道』であるから、従来の紀行にはまだ達していなかった、句と文との渾然たる調和も見られ、文は長短それぞれ場面々々に応じ、適宜に句をはさんでは段を結び、句の数も1、2句にとどめ、4句5句にわたるところはおのおの1か所ずつ、まことに整然とした体裁を示している⁽¹⁰⁾。

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

「月日は百代の過客にして……」に始まる発端より、「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」の結尾の1句に至るまで、十分に事を述べ情を訴えながら重からず、軽妙洒脱の文をつらねて、風雅の趣を伝え、遺憾ない円熟さに達している。

まこと、素龍がその清書本の跋に書きとどめているごとく、

からびたるも、艶なるも、たくましきも、はかなげなるも、おくの細道
みもて行に、おほへずたちて手たたき、伏て村肝を刻む。一般は簑をきる
きる、かかる旅せまほしと思ひ立、一たびは座してまのあたり奇景をあま
んず。かくて百般の情に鮫人の玉を翰にしめしたり。旅なる哉。器なる哉。
只なげかしきは、かうやうの人のいとかよはげにて、眉の霜の置そふこそ

元禄七年初夏

素龍 書

と讃嘆するのも至当というべきである。

5. 『おくのほそ道』の虚構

かつて、志田義秀博士によって、芭蕉の句には「実地実写の句であるに拘らずその季語を変更する改作をなしているもの」と問題にされて、この類のものは旅行吟に見られ、さらに、これは紀行中にも見られる。「紀行に於ける俳句の配置及び叙述の或るものに於て、旅行の事実の儘ではなく作為の施されてみるものがある」と、その「制作意識の不徹底」をつかれたこと⁽¹¹⁾がある。

やがて、芭蕉に随従して、『おくのほそ道』の旅を共にした曾良自筆『奥の細道随行日記』が世に出るに及んで、『おくのほそ道』本文記事との異同が対比されて、『ほそ道』本文の虚構が決定的となって、問題とされるにいたった。

すなわち、『日記』を実際の記録とすると、『ほそ道』本文と比べて、芭蕉がいかに事実を曲げて創作化しているか、いわゆるフィクションを施しているか⁽¹²⁾が明らかにされた。

その2, 3をあげる。

まず、飯坂（本文飯塚は誤り）泊りの箇所で、「夜に入て、雷鳴雨しきりに

降て臥る上よりも、蚤蚊にせゝられて眠らず。持病さへおこりて消入斗になん」と芭蕉は記しているが、曾良の日記には「夜に入、(雨)強」とのみあって、病気の記事がない。持病がおこってこそ、次の「猶夜の餘波心すゝまず」云々という、あとにつづく文が生きてくるのである。

越後路に入って、本文では、「酒田の餘波日を重て、北陸道の雲に望。遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞、鼠の關をこゆれば越後の地に歩行を改て、越中の國一ぶりの關に到る。此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」とのみ記されて、これは日記では、酒田から市振まで16日、鼠の關からは14日かかっているのに「此間九日」となっている。しかも、この間の記事はこのように簡略化されている。

とくに、越中市振の宿での挿話、伊勢参宮に向かう新潟の遊女と同宿し、「一家に遊女もねたり萩と月」の名句をのこして去る条は、「曾良にかたれば書きとゞめ侍る」とあるにも拘わらず、曾良の日記には一筆もふれていない。

もちろん、紀行は、正確な客観的記述を必要とする、地誌、案内記の類と異なるものである。紀行の道中における風景美や感懷が誇張されて描写されたりすることは、そこに旅人の主観が映発されて、かえって紀行に生彩を与えるのである。

ところが、紀行の骨格をなす紀行の「実際」が、紀行文筆者の主観によって、ほしいままに改変され、記事に加筆削除が行なわれているとすると、ここに紀行の本質的な品価にふれてくる問題となる。

志田博士の「制作意識の不徹底」という所論が出るのは当然のことといえよう。

ところが、このような問題をさらに検討していくと、「とんだ筋ちがいのなし」という反論⁽¹³⁾もあらわれてくる。

『おくのほそ道』と『日記』との記事の違いは、芭蕉自身の記憶の錯誤、混淆であって、意識的な虚構は認められないとして、この両者はどちらも信用し

て、互いに相補的なものなので、結局、芭蕉と曾良の著眼点の相違、さらに言えば、両者の世界の捉え方の相違とする考え⁽¹⁴⁾も出された。

こういう考え方は、さらに高次の立場におしすすめられて、両者の別は明確に立てた上での見解に展開してきた。

曾良の日記は単なる実用的な旅程の記録で、『おくのほそ道』は文学作品なのであって、その性格を全く異にするものである。その性格を異にしている両者を同列に比較して云々すること自体当を失している。文芸作品はその素材的事実を離れてそのままを鑑賞すべきものである。文芸作品である『おくのほそ道』を、『日記』の現実を以て裁断することは近代自然主義文学観に毒されている所以で、現代の創作心理をそのままあてはめて割りきる性急な態度は警める⁽¹⁵⁾。両者の別を立てての見解である。

これにはやはり、芭蕉自ら紀行について述べた、よく引用される例の『笈の小文』の1節が掲げられている。

抑、道の日記といふものは、紀氏、長明、阿佛の尼の、文をふるひ情を盡してより、餘は皆俳似かよひて、其糟粕を改る事あたはず。まして淺智短才の筆に及べくもあらず。其日は雨降、晝より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれたれもいふべく覺侍れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。されども其處々の景心に残り、山館野亭のくるしき愁も、且ははなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれぬ處々、跡や先やと書集侍るぞ、猶醉ル者の慄語にひとしく、いねる人の謔言するたぐひに見なして、人又亡聴せよ。

芭蕉は、ここに明確に紀行に対する独自の見解を披瀝している。これを述べた『笈の小文』は、この意図の下に記されたものであろうが、なおまだその意図を十分に果たすまでにいたらず、『おくのほそ道』においてはじめて黄奇、蘇新の高さまで到達して、旅のあわれを描きつくして、彼が意図していた紀行文学の完成をとげたのである。

6. 虚構の実質

この『おくのほそ道』の虚構の要因をあげて、その実質を明らかにしていこう。

まず、執筆動機の大きな要因として、「西行五百歳忌行事」ということ⁽¹⁶⁾があげられている。

この行事について、元禄2年(1689)2月16日正当説をとる荷兮ら名古屋蕉門と、同10年(1697)2月15日正当説をとる其角ら江戸蕉門の確執に悩んだ芭蕉が元禄2年に西行遺跡を尋ねる旅に出、その成果を元禄10年に刊行して、両者の顔を立てようとする事情があったという。

つまり、平泉、象潟、種の浜といった西行所縁の地を拠点とする、この『おくのほそ道』の旅は、芭蕉の西行五百歳忌記念行事なのであって、西行の「死んだ場所ではなく、ゆかりの土地であとをとぶらうこともある」として、謡曲の例が引合いに出されている。

このように『おくのほそ道』旅行の固有の動機を求めると、この西行五百歳忌がうごかせないことになってくる。

『おくのほそ道』の体裁については、『長明道之記』とし当時刊行されていた『東関紀行』が、その直接の出典⁽¹⁷⁾と目されている。

『幻住庵記』が出典のみならず全体の構想まで、『方丈記』をふまえていることは、定説となっていてところであるが、『おくのほそ道』を、同じく長明作と伝えられてきた『東関紀行』によるとみることもできるのである。

さらに深い関係を、謡曲の上に見出した。すなわち、この『おくのほそ道』を、謡曲的主題の中に統一的にとらえようとする方向が生じた。

無常、漂泊、風狂などの精神的方面の影響を見たり⁽¹⁸⁾、その趣向の上に、ワキ僧の立場で旅をたのしんでいるという見方⁽¹⁹⁾である。

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

とくに、この能のワキ僧の擬態として、主人公の形象を見ていこうとする立場は注目されている。

さて、このようにして『おくのほそ道』の虚構の要因を追究してくると、虚構即創作という点に近づく。

創作の上で、芭蕉のように句文の推考に苦心を重ねた場合、その推考過程の上から虚構が生じ、その虚構によって実をはなれて創作に化することは明らかである。

そこで、この創作につらなる推考過程を知ること大切な手がかりとなる。そのために、草稿本が残されていると重要な資料となってくる。いくつかの草稿本を対比して、その先後の順が推定できれば、そこから推考過程をたどり、虚構の箇所を発見して、創作の秘密も明らかにできよう。

現在、さきにも述べたように、草稿本の現存は確認されていない。

ただ、さきにはふれなかった、門人による写本の中に曾良自筆本と伝えられるものが紹介されている⁽²⁰⁾。未定稿から筆写し、のち定稿によって校合したという。

この本だけでは、推考の上でとり立てて顕著な問題となるに足る事項は得られていない。

別に、さきにあげた越後路の箇所で、『ほそ道』原本についての興味ある資料が示された。

先年、信濃より出たりとて、祖師（註 芭蕉）眞筆の草稿に、曾良が腰帳を添て賣物に出たる事あり。松平志摩守との買上られたり。其御草稿には、越後路の事も多く記し置れし也。さるを校合の時にや、朱あるひは墨もて十字に打消して有とそ。夫を見たる人の話也。其譯は註者の云る處、予の心に符會す。

本間文庫旧蔵本の、板本梨一著『奥細道菅菰抄』に多くの朱注があり、これ

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

を所蔵していた本間契史の自筆とされている。その1つなのである。

この文末の「註者の云る處」とあるのは、『菅菰抄』の著者梨一が、越後路の事が『ほそ道』に出ていないのは、「病のおこるのみにあらで、かならずゆへあるべし」といい、この辺りは、歌枕名所や旧蹟もあまりないので、「紀行の長々しからむ事を恐れて、かくはぶき申されし成へし」とあって、その意見に同じている。

文中「曾良か腰帳」とあるのも、おそらく『随行日記』のことで、旅先の途次、常に携行していた手控えの帳面であることが想像される。

以上推考の面については、後考をまつほかなく、なお草稿本出現そのものの期待が大きい。

ちなみに、その後、曾良本のほか、この類では、岡田利兵衛氏紹介の「柿衛本⁽²¹⁾」を加えたのみである。

なお、草稿本としては、さきに、野坡所蔵の未定稿と曾良所蔵の未定稿があげられていた⁽²²⁾が、前者は門人梅従に伝わって、延享元年(1744)以後行方知れず、後者も天保11年(1840)雲州母里藩松平志摩守に伝わったが、江戸定府の藩主であったため、母里を調査したところでは伝存が認められない。そして、野坡の方は大阪で、曾良の方は東京で、いずれも焼失したものと思われ、その出現は期待できないとされている。

最後は、弥吉菅一氏の「芭蕉の紀行」⁽²³⁾をかりて、創作的虚構の問題のしめくりとしたい。

まず、井本農一氏の、この問題を論じられた2論考⁽²⁴⁾をあげられ、「芭蕉の紀行・日記」についての論考から

- ① 余技でなかったということ
- ② 新文芸スタイルの創造であったこと
- ③ 自己の感懷をもちこんだということ

の3点を要約し

さらに、「芭蕉の紀行について」から、

- ① 紀行と俳諧の一体不可分性
- ② 自己の主観の投影としての紀行
- ③ 紀行として創作されたこと

の3点を、その特色として示された。

ここから、氏は、ご自分の立場で、次の4点にしぼって、現在、この問題について考えられる事項を手際よく述べておられる。

a) 態度の問題 b) 文芸性の問題 c) 俳諧性の問題 d) 統一性の問題

a) 態度の問題

この問題は、次の2つの観点から分析してとらえておられる。

- 1) 芭蕉の旅そのもの
- 2) 紀行文創造

1)の芭蕉の旅について、人生＝流転＝行脚（旅）＝俳諧と考えられ、これらがみな1つなのである。旅をたどることは、人生をたどることであり、人生の本質追求と、その実践は、当然旅への本質追求であり、その実践であり得るとされた。

2)こうした生命をかけての旅の追求であったからこそ、おのずから告白行為にまで展開したのであって、それが芭蕉にとって、余技でない本格的な紀行文学の追求となったのである。

b) 文芸性の問題

曾良の日記による『ほそ道』の虚構を、文芸性の実証としてとらえ、「日光」の条を例示して⁽²⁵⁾、虚構の実態を明らかにされている。文芸は虚と実の間にあるということに尽きるとする。

c) 俳諧性の問題

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

この文芸性を明確にして、俳諧性として打ち出された。文芸としての紀行『ほそ道』は、つまり俳諧的紀行なのである。

ここでは

- 1) 句と文との照応にみられる連句的性格
- 2) 「地の文」がもつ連句的性格
- 3) 全体構造にみられる連句的性格

の3点から、俳諧的紀行の連句的性格の解明を行なわれた。

d) 統一性の問題

芭蕉の紀行文は、このような連句芸術の域のみにとどまるものでなく、それをこえた「あるもの」がある。

連句と異り、これは芭蕉ひとり身の創作なのである。内面的統一をもって、芭蕉のもつ「人生無常」「すべてこれ流転」の世界観につらぬかれているものである。

弥吉氏によって、『おくのほそ道』の虚構の実質にふれる問題は、4点によって解明されたのであるが、今後もおそらくこの点にふれて、いろいろの見解が展開されていくことになるだろう。

執筆動機からはじめて、虚構の内外の要因をあげ、虚構の意図と内実を明らかにしてきたのであるが、ここにとりあげた事項の当否・評価は、今後の研究の発展の中におのずから定まっていくであろう。

これらの虚構の問題を幾多はらむが故に、『おくのほそ道』の紀行文学としての本質と価値は一層重きを加えている。

この『おくのほそ道』を日本紀行文学史の最高峰として、他の紀行文学作品の考察をすすめながら、紀行文学の本質の解明に達せられれば幸である。

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

- 注(1) 石川 徹「土佐日記における虚構の意義」(昭26『国文学の新研究』)
- (2) 萩谷 朴『土佐日記』(日本古典全書)の解説の項
- (3) この事項、阿部喜三男『松尾芭蕉』(人物叢書)略年譜による
- (4) 「ことさらに旅のめあてを奥州路に選んだのも、ひとつには未知の邊境に艱難の旅をかさねることによって、無所住無所着の旅の思ひに徹したいためではなかったらうか。しかも白川の關を越えたあなたには、古來風騷の士にとって忘れがたい憧憬の地、松島・象瀉を始めとする、數々の歌枕に知られた名所が彼の心を招いてゐた。さらに行く先々には、かねて芭蕉が道の友と憑んだ人々も少なくはなかった。舊知・未知の俳友と語らひ、ともに會吟することによって新しい道を拓かうとする期待は、悲壯な彼の旅のゆくてを明るく照らしてゐた。」 額原退蔵・能勢朝次『奥の細道』(角川文庫)解説
- (5) この章日本古典文学大系『芭蕉文集』解説(杉浦正一郎博士担当)による
- (6) 同上、および杉浦正一郎『芭蕉研究』第三章の一「『奥の細道』伝本考」による
- (7) 素龍は、歌学を芭蕉俳諧の師、北村季吟の次男である北村正立に学び、手跡は上代様に秀でていた人であった。(杉浦『芭蕉研究』p. 112)
- (8) 高橋富雄『みちのくの世界』(角川新書)「一二奥の細道」
- (9) 阿部喜三男『詳考奥の細道』2 概観の諸説
- (10) 岩田九郎「円熟した紀行文学」(解釈と鑑賞・奥の細道総覧 昭32・3)
- (11) 志田義秀『芭蕉展望』所収「芭蕉と制作意識」
- (12) 阿部喜三男「奥の細道と曾良の記事の比較」(解釈と鑑賞・奥の細道と曾良日記 昭26・11)
- 杉浦正一郎『芭蕉研究』第三章の四「『奥の細道』の制作心理」
- (13) 重友 毅『日本文学論攷』所収「『奥の細道』序説」
- (14) 小宮豊隆「『曾良日記』の真实性」(解釈と鑑賞・奥の細道と曾良日記 昭26・11)
- (15) 額原退蔵・能勢朝次『奥の細道』(角川文庫)解説
- (16) 中西 啓「去来と芭蕉俳論輕みの解明」(長崎学会)
- 山本唯一「奥の細道旅行と西行五百歳忌」(解釈と鑑賞 昭40・8)
- (17) 井本農一「出典といふことについて」(国語と国文学 昭31・3)
- (18) 赤羽 学「謡曲との関連による奥の細道の文芸性の探究」(岡山大学法文学部紀要・13 昭34)
- (19) 安藤常次郎「謡曲と奥の細道」(早大教育学部学術研究・13 昭39)
- (20) 杉浦正一郎『芭蕉研究』第三章の三「『奥の細道』の制作過程」
- (21) 岡用利兵衛「柿衛本『奥の細道』」(連歌俳諧研究・20 昭35) 付、翻刻
- (22) 杉浦正一郎『芭蕉研究』第三章の一「『奥の細道』伝本考」
- 日本古典文学大系『芭蕉文集』解説(杉浦正一郎博士担当)

『おくのほそ道』を通して見た紀行文学の性格

- ②3 弥吉菅一「芭蕉の紀行」(解釈と鑑賞・芭蕉-人と作 昭36・8)
②4 井本農一「芭蕉の紀行・日記」(解釈と鑑賞 昭28・10)
井本農一「芭蕉の紀行について」(国文学・芭蕉の総合探求 第2巻第4号)
②5 本文では次のような順序になっている。

- ① 室の八島……………(3月29日)
- ② 仏五左衛門……………(3月30日)
- ③ 日光参詣……………(4月1日)
- ④ 黒髪山と曾良……………(4月1日)
- ⑤ 裏見の滝……………(4月1日)

ところが、曾良の日記では

- ① 室の八島……………(3月39日)
- ② 鹿沼宿……………(3月29日)
- ③ 日光参詣……………(4月1日)
- ④ 仏五左衛門宿……………(4月1日)
- ⑤ 裏見の滝巡見……………(4月2日)

となっており、順序はあきらかにことになっている。なぜか。

事実に従えば、②の仏五左衛門は③の日光参詣の後としなければならぬ。とすると、「室の八島」から「日光参詣」に直結する。すると、神事が2つも重なることになる。面白くない。また、事実通り、「仏五左衛門」を「日光参詣」の後にもつてくると、「曾良」の人事と重なる。曾良のことは、黒髪山とからみあわせて、虚ではあるが、ここで出したい。そして、ここの条の頂点としては、「日光参詣」に求めたい。以上のような理由から、芭蕉はあえて、虚構をしたのであろう。